

1 絵画資料の発問の分類化

前回、社会科教科書に掲載されている「自由民権運動の演説会」(図1)のような絵画資料の発問が、以下の4つに分類されることを示した。

- A 絵画資料に描かれているものを確認する発問
(例「誰がいるか。」「どこか。」)
- B 絵画資料に描かれているものを読み取る発問
(例「何をしているのか。」「どんな様子か。」)
- C 絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問
(例「弁士、警察、聴衆は何と言っているのか。」「なぜ、このようなことになっているのか。」)
- D 絵画資料制作者の意図に関する発問
(例「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か。」)

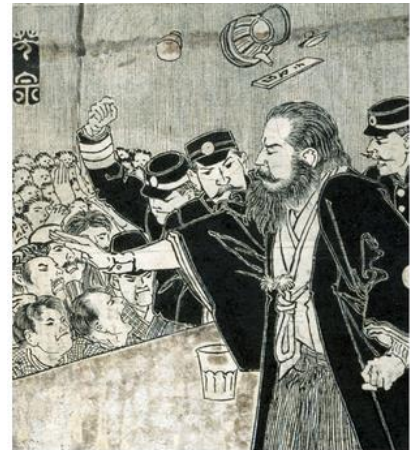


図1 「自由民権運動の演説会」
(『小学社会 6上』教育出版
p. 100) (東京大学法学部附属
明治新聞雑誌文庫所蔵)

また、小学校教員22名を対象としたアンケート調査では、AからDの発問数は表1のような結果となった。

表1 絵画資料の発問数(のべ数)と割合(n=22)

発問の種類	発問数(割合)
A 絵画資料に描かれているものを確認する発問	5 (7.1%)
B 絵画資料に描かれているものを読み取る発問	24 (34.3%)
C 絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問	41 (58.6%)
D 絵画資料制作者の意図に関する発問	0 (0%)
発問の合計数	70 (100%)

Cの「絵画資料と歴史的事実との関連に関する発問」は、教科書の絵図の掲載ページのタイトル「自由民権運動が広まる」が示すとおり、学習のねらいに直結するものである。たとえば、例にある「演説する人、警察、聴衆は何と言っているのか。」という発問を投げかけ、それぞれの発言を予想させた後に、「なぜ、このようなことになっているのか。」と引き続き問うことで、児童は自由民権運動に至る背景や経過を意欲的に調べるであろう。

また、前回述べたように、その前提となる知識(例：描かれている人物が「弁士」「警官」「聴衆」であること)を確認したり、読み取らせたりする発問がAとBである。これらの発問の準備

をしておくことが児童の絵画資料の読解力の基礎を伸ばすことにつながることはいうまでもない。その点では、AとBの発問数が一定数あることは重要なことである。(Aの数は少ないが、確認の発問は行わず教師が端的に説明をしている場合も多いと思われる。)

2 「絵画資料制作者の意図に関する発問」の重要性

A, B, Cの発問に対して、Dの「絵画資料制作者の意図に関する発問」について、アンケート調査で該当するものはなかった。例である「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か。」のように、この発問は、絵画が何の目的で描かれたのか、教師が絵の主題を把握しておかないとできない発問である。教師にとっては教材研究が不可欠であり、その知識のうえで成り立っている発問である。

そもそも先の絵画は、自由民権運動推進の立場から描かれているものである。キャプションに「自由民権運動の演説会」とあり、政府の立場の警官が、聴衆のみならず、弁士に演説を中止させる行動をとっている。特に、3名のうちの真ん中の警官が弁士に対して険しい表情で詰め寄っていることからそのことが理解できる。それに対して、聴衆は土瓶や茶碗を投げて猛烈に抗議をしている。教科書の本文の表現を借りるのなら、「政府は、この動きをおさえようと、新聞や演説会の取りしまりを厳しくした」様子が描かれている。そのような政府に対する批判がこの絵画に端的に表現されているのである。

教師が教材研究でこのような主題を理解することは、「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か。」という発問への反応を豊かにすることにつながる。「自由民権運動が広まってきて、政府のかわりの警官が止めさせようとしていることを伝えたいのではないか。」と児童が発言したなら、「それは、絵のどの部分からわかるのか。」「本文のどこにその事実が書いているか。」といった追加発問で、絵画資料読解の視点を児童が深めることができるであろう。

なお、2017年告示の『小学校学習指導要領解説社会編』には、絵画資料の特性について以下のよう

絵画などの資料については、資料の特性に留意して調べることができるようにすることが大切である。例えば、遺跡や遺物については、当時の人々の生活の様子を探る上で参考になる資料であること、絵画については、当時または後の時代に作成者が意図をもって描いた資料であり、事象について考える手掛かりになる資料であることなど、各々の資料の特性に留意させることなどが大切である。

このことは、絵画資料制作者の意図に関する発問の重要性を示唆している。長年教科書に掲載されている「蒙古襲来絵詞」や「長篠合戦図屏風」なども、この絵画と同様に絵画そのものについての教材研究を行い、「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か。」という発問をすることで、児童のさらに深い読み取りが期待できると考えられる。

3 絵画資料読解のための発問の定型化の可能性

先のDの「この絵を描いた人が伝えたかったことは何か。」という発問は、多くの絵画資料で活用が可能である。アンケート調査では、他にもそのような発問が記載されていた。たとえば、「この絵を見て、気づいたこと、思ったこと、分かったこと、疑問は?」「まとめるとどんな場面か。」というものである。前者は、絵画資料から児童の考えを広げようとするものであり、後者は児童の考えを束ねようとするものである。

このような発問の存在は、**絵画資料を読解するための発問の定型化が可能であることを示している。**連載の4回目で述べた絵画資料の指導方法が決まっていない教師や、指導が十分でないと考えられる教師にとっては、その有効性への期待は大きいであろう。今後の絵画資料の発問研究で重要なこと考える。

※参考文献

- ・佐藤正寿・山田智之(2019)「小学校6年生社会科における絵画資料の読解に対する教師の意識と、絵画資料読解場面における発話に関する考察」(東北学院大学教育学科論集 第1号)
- ・池野範男(1992)「歴史理解にける視点の機能(1)－絵画資料理解の分析を通して－」(全国社会科教育学会『社会科研究』第40号)
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説社会編』P127